

◆◆◆◆ INTRODUCTION ◆◆◆◆

【終身会員のご紹介】

私の歩みと生理学

京都産業大学非常勤講師
自治医科大学医学部客員研究員
元京都産業大学生命科学部教授
齋藤 敏之



この度、終身会員としてご承認いただき、関係の皆様へ厚く御礼申し上げます。

私は1982年3月北海道大学（獣医学部）を卒業後、同・大学院獣医学研究科に進学、獣医生理学教室にて睪臓や副腎における分泌機構について、生理学の研究を始めました。当時、分泌に必要な細胞内カルシウムイオン濃度変化を測定するmicrofluorimetryが未開発でした。そこで、メーカーと協力して開発を進め、試行錯誤の末、何とかその変化をとらえることができました。忘れられない思い出の一つです。一方では、Mandel教授やMagistretti教授の論文を読んで脳のグリアの働きと酸素供給に大きな関心をもっていたことから、脳におけるVIP等の働きを解析する研究に挑みました。それらの成果の一部は1990年日英合同生理学会等で発表することができ、その後の大きな励みとなりました。

1992年4月から農林水産省畜産試験場（つくば市、当時）に研究の場を移しました。その後、組織改編により（独）農業生物資源研究所に異動となりました。この間、家畜の行動調節とストレスを軸に研究を進めました。幸い、脳研究の振興という追い風もあり、ブタやウシの脳定位固定装置の開発・脳地図の作製といった、基盤整備の研究に参画しました。また、（旧）科学技術庁の援助を受け、海外でミニブタの脳を勉強する機会に恵まれました。2009年秋からは、自治医科大学に開設

された「先端医療技術開発センター」での研究に参画する機会を得ました。特に、機能的な脳マッピングの研究では、渡辺英壽主任教授（脳神経外科学教室）をはじめ、臨床や工学系の研究者の方々との共同研究を通して貴重な経験を積むことができました。

2010年4月、生命系の学部新設に伴い、京都産業大学に移りました。所属の動物生命医科学科では生理学講義と実習を担当しましたが、実験動物技術者1級の資格取得を念頭に、後者では動物個体を用いた実習に力を入れました。一方、研究室（動物生理学研究室）では、「ストレスと神経炎症、ミクログリアの動態」を研究テーマとしました。具体的には、脳の血流や酸素供給を視野に入れながら、実験小動物を用いて個体レベルでの病態生理学的研究を進めました。また、自治医科大学先端医療技術開発センターでの研究も継続、二足わらじの展開となりました。学部再編後も、これまでと同様に生理学の教育・研究を継続しましたが、2023年3月末、新型コロナに翻弄されながら定年退職を迎えました。退職後は、非常勤講師として解剖生理学講義を担当しております。生理学は解剖学とともに非常に重要な基礎科目と言えます。ポストゲノム研究の中で、生理学教育をさらに充実させ、その啓蒙活動を進めていく上でも、日本生理学会会員の皆様のお力添えが必要です。今後ともよろしくお願い申し上げます。



【終身会員のご紹介】

シナプス研究者としてのこれまでの歩み

東京大学名誉教授
帝京大学先端総合研究機構特任教授
狩野 方伸



私は1982年に東京医科歯科大学医学部を卒業し、東京大学大学院医学系研究科の伊藤正男先生の研究室の大学院生になりました。伊藤先生は、小脳による運動学習の基盤と考えられる小脳皮質のシナプス可塑性（長期抑圧）をこの年に報告しておりました。私は、長期抑圧のメカニズムを研究することになり、幸運にも、このシナプス可塑性に関わるグルタミン酸受容体サブタイプを同定することが出来ました。その後、自治医科大学に職を得て、前庭小脳の視運動性眼球反応について研究した後、マックス・プランク生物物理化学研究所に留学し、興奮性シナプスだけでなく抑制性シナプスにも長期可塑性が存在することを発見しました。帰国後に、当時神経研究に導入されたばかりの遺伝子改変マウスを用いて、シナプス刈り込みの研究を始めました。出生直後の動物の脳には未熟なシナプスが過剰に存在しますが、生後に、有用なものは強化固定化され、不用なものは除去され、大人の神経回路が完成します。これが「シナプス刈り込み」で、これを研究するためのモデル実験系として、私は小脳の登上線維からプルキンエ細胞へのシナプス結合の生後発達に注目しました。これまでに、神経活動が如何にして有用な登上線維シナプスを強化し、それ以外を除去するか、その一連の機構を明かにしてきました。この研究は自治医科大学で開始し、理化学研究所、金沢大学、大阪大学、東京大学において継続してきました。一方、金沢大学時代には、内因性カンナビノイド（脳内に存在するマリファナ類似物質）

による逆行性シナプス伝達修飾という現象を見つけました。シナプス後部の神経細胞の活動が過剰になると、内因性カンナビノイドが作られて、シナプス後部から前部に「逆向き」に作用し、カンナビノイド受容体の活性化を介して神経伝達物質の放出を抑制するもので、多くの脳部位で見られるシナプス伝達調節機構と考えられます。このように、これまで40年以上にわたって、シナプスの機能発達と可塑性をメインテーマとして、生理学的観点から研究を継続してきました。

生理学会には1987年に入会し、1991年からは評議員、現在は学術・研究委員会委員を務めております。私は2023年3月をもって東京大学を定年退職しましたが、現在は帝京大学先端総合研究機構に移り、もうしばらく研究を続けるつもりです。引き続き、生理学会に貢献できればと思いますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

【略歴】

- 1982 東京医科歯科大学医学部卒業
- 1986 東京大学大学院医学系研究科博士課程修了
- 1986 自治医科大学 助手
- 1990 自治医科大学 講師
- 1995 理化学研究所 チームリーダー
- 1998 金沢大学医学部 教授
- 2005 大阪大学大学院医学系研究科 教授
- 2007 東京大学大学院医学系研究科 教授
- 2023 帝京大学先端総合研究機構 特任教授
東京大学名誉教授



【終身会員のご紹介】

日本生理学会でのこれまでの歩み

札幌医科大学名誉教授
松山 清治



この度は日本生理学会終身会員としてご承認頂きましたこと誠にありがたく存じます。私は1984年4月森茂美先生が主宰されていた旭川医大生理学第二講座の大学院生となつてから2022年3月札幌医大で定年退職を迎えるまで約40年にわたり生理学の研究及び教育に携わってきました。日本生理学会大会に初めて参加したのは、1985年3月の第62回久留米大会でした。当時大学院生としてポスター発表しましたが、ポスターの作り方は現在と大きく異なり、手製の図表を模造紙に貼り付けて説明文を手書きするなど随分時間を要し、幾日か徹夜してポスターを完成させたことが今では懐かしい思い出です。

私の主たる研究テーマは歩行制御の中樞神経機構の解明でした。歩行運動の基本的性質は自動性リズム運動であり、その発現には脳幹・脊髄など下位脳が関わり、また外界に適応して巧みな歩行運動を発現するには大脳皮質・基底核・小脳など上位脳の働きが重要となります。私は歩行実行系のシステム構成について構造と機能の両面の特徴を知るため、神経解剖学および神経生理学的手法を用いて神経構築と作動様式に関する解明を進めてきました。この間、研究の場は旭川医大、生理学研究所、札幌医大と移りましたが、関係者皆様からのご支援のお蔭で途切れることなく研究を推進できましたこと大変感謝しております。

2008年4月札幌医大保健医療学部教授に就任してからは、作業療法・理学療法・看護3学科の「生理学」と「精神医学」の学部および大学院教育に携わることになりました。「生理学」は全領域の教

育を担う必要から、複数の教科書や参考図書を取り寄せて講義資料を作成したりしましたが、札幌医大で青木藩先生から教育についてご指導頂いたことや山形大学の土居勝彦先生のもとで植物性機能の研究に従事した経験が大きく活かしました。その後生理学エデュケーター認定制度が整備され、私も2015年に生理学エデュケーターの認定を頂き、以来毎年の大会で生理学モデル講義を拝聴し、自らの授業の工夫に役立てさせて頂きました。

1989年に評議員となり、その後研究倫理委員会委員や北海道地区選出の常任幹事として日本生理学会の運営に携わる光栄な機会にも与りました。札幌で開催された第81回と第93回日本生理学会大会では大会関係者として大会運営にも関わりました。両大会とも成功裏に終えましたが、日頃から親密な交流を通して連携を深めてきた北海道生理学会の一員として大変嬉しくかつ誇らしく思っている次第です。

2022年3月札幌医大を定年退職し、生理学の第一線から退くこととなりましたが、今後も日本生理学会会員として在り続けたいと思い、終身会員の申請をしました。奇しくも日本生理学会第100回記念大会の総会で終身会員のご承認を頂き、私としての記念にもなりました。末筆になりますが、日本生理学会が次なる100年に向けて今後益々発展されますことを心よりお祈り申し上げます。

【略歴】

- 1984. 3 旭川医科大学医学部医学科卒業
- 1988. 3 旭川医科大学大学院医学研究科修了

- | | | |
|----------|-------------------------------|--|
| 1988. 4 | 山形大学医学部生理学第一講座助手 | 教授 |
| 1991. 4 | 旭川医科大学医学部生理学第二講座助手 | 2008. 4 札幌医科大学保健医療学部作業療法学科教授（生理学・精神医学担当） |
| 1993. 12 | 岡崎国立共同研究機構生理学研究所生体システム研究部門助教授 | 2008. 4 札幌医科大学附属病院神経精神科兼務教授 |
| 1994. 4 | 総合研究大学院大学生命科学研究科助教授（併任） | 2022. 4 札幌医科大学名誉教授 |
| 2000. 1 | 札幌医科大学医学部生理学第二講座助 | 2022. 4 江別市立病院認知症疾患医療センター・精神科 |



【終身会員のご紹介】

嗅覚記憶の研究

高知大学名誉教授
椛 秀人



この度、終身会員として寄稿のご依頼をいただきましたので、私のこれまでの研究の歩みをご紹介します。

ケンブリッジ大学の Keverne 博士は雌マウスの妊娠保障（維持）に不可欠な交配雄フェロモンの記憶形成に交尾刺激によって賦活されるノルアドレナリン（NA）作動性神経の嗅球への投射が重要な働きを担っていることを証明されていました。私は当時、生殖内分泌制御における NA 作動性神経の役割を解析していましたことから、1985年に Keverne 博士の研究に加わり嗅覚記憶の研究をスタートさせました。まず、フェロモン記憶がどこに蓄えられるかという根本的な問題に対して、「対立仮説」を立て、判定実験は、得られた結果が対立仮説の一方を可能な限り棄却するようにデザインするという戦略で突き進み、棄却されずに最後に残った脳部位が脳皮質や海馬でもなく、二つの主要な嗅覚経路（嗅覚系と鋤鼻系）のうち鋤鼻系の最初の中継核である副嗅球でした。記憶の座が判明したことで記憶の詳細なメカニズムの解析が可能となりました。

次の大きな仕事は代謝型グルタミン酸受容体 mGluR2 の機能の研究でした。当時、京都大学の中西重忠先生のグループは代謝型グルタミン酸受容体（mGluR1～8）遺伝子のクローニングに成功され、その発現部位と機能の研究で世界をリードされていました。その中で mGluR2 が副嗅球に高密度に発現しているということで、mGluR2 の選択的なアゴニストを使って共同研究を行いました。雌マウスを雄フェロモンに曝露させながら副嗅球の mGluR2 を活性化すると、交尾刺激なしに、交尾刺激によって形成される記憶の特徴を忠実に反映した記憶が形成されるという結果でした。この成果は代謝型グルタミン酸受容体が記憶学習に関与することを行動の面から証明した最初の論文となりました。

フェロモン記憶は記憶学習研究の優れたモデルですが、弱点も有しています。それは妊娠阻止（ブルース効果）を惹起するフェロモンの化学的な実体が未だ十分に解明されていないことです。私たちは最近、デューク大学の松波宏明先生との共同研究で、ミトコンドリア呼吸鎖酵素の NADH

dehydrogenase 1 と NADH dehydrogenase 2 の N 末端から 9 つのアミノ酸からなるペプチドのアミノ酸配列がマウスの系統間で異なり、非自己のペプチドがブルース効果を惹起するなど個体認識の手がかりとなる匂い分子として機能していることを見出しました。今後さらに、交尾前の雄フェロモンと交尾して馴染みとなった同じ雄フェロモンが脳内にどのように表現されているか解析したいと思っております。

【略歴】鹿児島大学農学部獣医学科卒業、徳島大学大学院栄養学研究科博士課程修了、高知医科大学医学部助手、ケンブリッジ大学解剖学科へ留学、高知医科大学医学部助教、鹿児島大学農学部教授、高知医科大学医学部教授、岡崎国立共同研究機構（自然科学研究機構）生理学研究所環境適応機能発達研究部門客員教授、高知大学医学部教授を経て高知大学名誉教授となる。



【終身会員のご紹介】

石の上にも三十年

山形大学医学部生理学講座
藤井 聡



「十年一昔（じゅうねんひとむかし）」という四字熟語があります。辞書を調べてみますと「時のたつのが早く、世の移り変わりが著しいということ。わずか十年という期間でも、振り返れば、遠い昔のように思われる」と書いてありました。私は平成 6 年に山形大学医学部生理学第二講座で助手に採用されて以来、約 30 年を山形大学で生理学研究に従事してきました。電気生理学の実験装置の前に身を置いて「十年一昔」を 3 回ほど繰り返しました。

山形大学医学部生理学第二講座は昭和 49 年（1974 年）4 月 1 日に、東北大学医学部応用生理学教室から西山明德先生を初代教授として迎え開設されました。昭和 56 年（1981 年）8 月に西山教授は東北大学生理学第一講座へ転出され、昭和 57 年（1982 年）7 月に加藤宏司先生が秋田大学医学部生理学第一講座より第二代教授として着任されました。加藤教授が主宰された講座では神経生理学研究が研究テーマに加えられました。その後山形大学医学部では二講座ありました生理学第一講座

と第二講座が統合されました。そして、加藤教授は平成 19 年（2007 年）3 月に退職されました。私は平成 20 年（2008 年）3 月に統合された生理学講座で第三代教授になりました。

日本生理学会には 1986 年に入会し今日に至ります。その間に東北地区理事として 2014 年 3 月～2018 年 3 月および 2020 年 3 月～2024 年 3 月を任期に選任していただきました。さらに 2022 年に第 99 回日本生理学会大会長を拝命し、仙台市で東北大学と共同して大会を開催しました。

私は昭和 53 年（1978 年）に秋田大学医学部に入学しました。在学していた当時、私は神経生理学が全くわかりませんでした。3 年次で受けた本試験には当然落第し、夏休み明けに 1 年間に 1 度実施される再試験を何回か受験しました。それでも進級が出来たのですが、生理学の教科書は捨てられずに棚の中にあり、再試験の準備で神経生理学の章を読むたびに理解が出来ず眩暈がしたものでした。その内容をひたすら暗記して、やっと合格しました。

その私も最終学年になり階段教室で5年生と一緒に合同講義を受けていた時の事でした。臨床家で実務に長じた教授が「前にいた大学ではベンチレーター1台を学生には解体させて構造を学ばせたのだが、君たちにはやらせられない」とおっしゃったのです。そして、教授先生は講義の最後に「なにか質問はあるか?」と問われました。卒業を目前に控えての私は生意気にも以下の質問を先生にしました。

「それは先生が前にご勤務なさっていた学生が優秀で、私たちがそれよりも劣っているからでしょうか」「私はこの大学で6年間学びました。6年生の現時点でそれほど優劣が明瞭ならば、それは私たち学生個々の資質によるものなのでしょうか、それとも、教えている教員の質によるもののでしょうか」「おそらく先生のおっしゃっていることが事実だと思います。では、卒業したら生涯にわたり下積みとなるのでしょうか」

先生は「現実社会ではすべてそうだ」と即答され、多少間を置いてから「10年間一つのことをやってみれば明日が開ける」と仰られました。「石の上にも三年」という言葉はありますが、当時の私には10年間というのは途方も無く長く感じられるものでした。そして、卒業後10年で見つけたことが、皮肉にも学生時代に最も苦しんだ神経生理学だったのです。

大学教員として生理学を学生に講義しながら神

経生理学研究に従事して30年になろうとしています。学生には常々、「医学部というところは医学という science のうえに医療という art を教えるところである」「両者は切っても切り離せない関係であり、まず、君たちには science の部分を生理学で教える」と言っております。そして、教育と研究は切り離せません。研究者として探究心を大切にしてきました。学生には、医学において science の部分を大切にしよう、いつも講義中に話しています。山形大学医学部には他学と同様、柔軟な思考力と優れた実行力のある学生が多く学んでいます。その卒業生には「science」を大切に多くの臨床医が育っており、彼らは先輩たちの研究成果に触れて「自分達も医学を探究してみよう」と思っている、と考えています。

私の研究者生活はもう締め切り間近ですが、未だに実験を繰り返しています。実は自分の研究分野で、100%確かに思われていることでもほとんど判っていないこと、が多くあります。そして、それらを解明できていないのは自分の無能さによるものだと思っています。「次のランナーは頑張って解明してくれるのではないか?そして、そのランナーたちも一生懸命やった後に、いつかまた我々同様に自分の無能さを悟りその後進を育ててくれるだろう」と次世代の生理学者に期待しています。こうして過ごしてきた「石の上にも三十年」の間、山形大学医学部生理学教室を預かり、研究と教育



山形大学医学部生理学講座
前列中央が藤井聡



2023年春 日本生理学会第100回記念大会での筆者

に没頭しました。そして近いうちに去っていきま
す。

以下の言葉は生理学系統講義の最終日に毎年、
学生に提示しているものです。

講義を終えるにあたり

人のため世のために何かを
成し遂げたと考えるときに、君たちの夢は叶う

ご静聴ありがとうございました



【終身会員のご紹介】

生理学会・生理学研究の思い出

東京医科歯科大学システム神経生理学分野教授
杉原 泉



このたび、終身会員として承認いただき、関係
各位に御礼申し上げます。

私は、東京医科歯科大学医学部医学科を卒業後、
故古川太郎教授のもと、生理学の大学院に入りました。
将来性を深く考えはせず、若さのため単純
な興味に従ったのだと思います。生理学会の年次
大会は、最近ではほぼ毎回参加しております。多くの
講演は、自分の研究には直接関係なくとも、最
先端の情勢を理解できるような気がするのが喜ば
しい点です。

私は、初期の有毛細胞の機能の研究から、留学
時に小脳の分野の研究に移り、線維投射と縦縞区
画構造に関する形態学的な研究を主に行って来て
います。これまでの90余編の発表論文・著作を、
大半は自分自身で隔々まで手をかけて執筆する
ことができました。齧歯類小脳の第I脚小葉が、霊
長類小脳の第I脚・第II脚小葉と相同であり（つ
まり従来の命名に矛盾があり）、非運動機能を想定

私が学生講義で質問申し上げた先生は「10年間
一つのことを全力で取り組めば、人の世のために
成し遂げる何事かを見つけることができる」と教
えられたのです。私の生理学研究は「石の上にも
三十年」でしたが、その基盤は山形大学医学部で
作られました。日本生理学会で多くの研究者に出
会い、多くの方々に励まされて最後まで生理学者
として山形大学に勤務できました。日本生理学会
の皆様には、心よりお礼を申し上げます。

させる特異なパタンへの入力（大脳由来の入力も含め）・出力を持つことを発見したのが、主要な成果の一つです。

2009年の教授就任後、やりかけていた齧歯類での研究のため、研究室内に齧歯類の飼育・実験の環境を作りたいと思っていました。ところが、その頃大学で齧歯類の研究室内の飼育室の新設が事実上禁止され、2011年の地震で使っていた大学のコンベ飼育室が破損し別のものに改変されました。そのため、齧歯類の光遺伝学を含むような新しい生理学実験・行動実験は困難となりました。（他の会員からの助言もありました。）ところが、大学内で既に飼育室を持っている場合には飼育室の継続使用が認められていました。（研究室内でも、霊長類と食肉類の以前からの飼育室を使う実験は他のメンバーが継続しています。）私は、大学の共用実験室でトレーサーやAAVの注入実験を試みましたが、ステレオ装置や電気生理装置を持

ち込めないとこでの脳実験は苦勞しました。そこで、大学の共用マウス飼育室でのマウスの交配実験で標本を得られる小脳縦構造の発達過程の解析と急性電気生理実験（スライスパッチ実験）を始めることとし、これらではある程度の成果を得ることができました。

かなり後になり研究室内の齧歯類飼育室（第二種実験室）新設が認められるようになりました。そのとき学内のもう一つの生理学分野で新任の磯村教授が早速齧歯類飼育室を立ち上げたのに倣い、私も、ようやくマウス飼育室を新設することができ、トレーサーや AAV の注入実験が容易になりました。

これまで、ある程度の数の大学院生が参加してくれて一緒に研究できたことがうれしい思い出です。多くの者がポストク等で研究の分野に残っています。初期の修了生は独立した研究者になり、私のやりたくてできなかったようなことも含めて米国で活躍しているようです。

本年度の定年後は、終身会員の身分を励みと思ひ、未発表データを論文にまとめるような活動を当分の間継続したいと思ひます。そのことで日本

生理学会に微力ではありますが貢献しつづけられたらと願っております。

【略歴】

- 1983年 東京医科歯科大学医学部医学科卒業，大学院入学
- 1984年 日本生理学会会員
- 1986年 東京医科歯科大学医学部助手（生理学第一講座）
- 1989年 ニューヨーク大学留学，研究員（医学部生理学講座）
- 1992年 東京医科歯科大学医学部助手（生理学第一講座）
- 1995年 東京医科歯科大学医学部講師（生理学第一講座）
- 1999年 東京医科歯科大学医学部助教授（生理学第一講座）
- 2001年 日本生理学会評議員
- 2009年 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科教授（システム神経生理学分野）
- 2015年 日本生理学会生理学エディター



【終身会員のご紹介】

終身会員に承認され思うこと

浄土真宗本願寺派僧侶
土屋 徹



社員総会にて2024年度からの終身会員にご承認頂き、関係各位に篤く御礼申し上げます。私は修士課程修了後、化粧品会社に就職しました。工学部化学系の出身でしたのでクリームや歯磨きなど製品にかかわる仕事をするものと思っていましたが、配属されたのは、生物・皮膚の研究室でありました。当時、化粧品の有用性、つまり皮膚の

正常な働きや美しさを保つにはスキンケアが不可欠であることは多くの論文発表がされており、次の注目点は、全身の中での皮膚の役割ということでした。会社の研究部門のリーダーたちは、化粧品をすることが身体全体により効果をもたらすことを研究として進めていきたいと考えていたものと思われま

しかしながら、こうした分野の研究の考え方を
含め手法や装置など何もない状態でのスタートで
したので、国内留学という機会が与えられました。
(財)東京都老人総合研究所〔現、(地独)東京都
健康長寿医療センター〕の佐藤昭夫先生には研究
姿勢から始まり、実験計画、データの整理・分
析、学会発表、論文作成ほか、ありとあらゆるこ
とをご指導いただきました。社内にも研究設備が
導入できました。留学中は皮膚からの感覚入力
の自律神経機能や内分泌機能への影響についての一
連の研究に参加していました。佐藤先生に推薦を
頂き、1991年に生理学会に入会し、1994年に評議
員にして頂きました。

会社に復帰してからは製品情報に活用できる研
究を始めたいと思っていました。当時から「スト
レスは美容の大敵」というようなことが言われて
いて、そのことを新たに学んだ自律神経・内分泌
的手法と会社が得意としていた皮膚機能の評価手
法とを連結させて実験的に証明することにしまし
た。ストレスの皮膚機能の影響については、いく
つかの論文として発表出来ました。この研究の流
れは、化粧品で女性の幸福感が高まるといった心理
的な影響についての研究に進んでいくことになり
ますが、こうした一連の研究に携わっていくうち
に「ヒトの幸福」について興味を持つようになり
ました。

56歳を過ぎた頃、計算してみると、往復4時間
半の通勤をしていたことから、後10年生きるとし
て自分の自由時間が1年分にしかならないとい
うことに気が付いてその結果、会社を辞めました。
特段やることもないので、年金制度や保険制度、
労働関係法規や金融、ライフプランの勉強をしま
した。結果、1級ファイナンシャル・プランニ
ング技能士と社会保険労務士の試験に合格しまし
た。覚えてすぐに身に付く年齢でもないのに、お
金はない、時間だけはある生活の中では充実して
いた毎日でした。これらの勉強を通じて、それま

で漠然と考えていた不幸を和らげるというこ
と、幸福にしてくれるということは別次元のもの
ということがはっきりしてきました。合格の目途
がついたころ何気なくネットニュースを見ていた
ら、アナウンサーをされていた方が通信教育で仏
教を学び僧侶になったという記事があり、触発さ
れて私も同じ通信教育に入り修了しました。それ
から通信教育の大学院で学び、修士(仏教学)の
学位を頂きました。その後、ご理解あるご住職の
許可を頂き、11日間の得度習礼と10日間の教師
教修(これらの期間はテレビや新聞、電話もない
外界と遮断された環境で過ごしました)を経て、
今は僧侶として活動しております。具体的には築
地本願寺奉仕活動員として参拝にいらっしゃる方
たちの接遇をしたり、(一社)仏教情報センターで
の仏教テレフォン相談員や中央仏教学院通信教育
同窓会関東支部の役員を担当したりしています。

法要でお話をしたりご質問にお応えしたりする
こともあります。こうしたとき、実験を進める日々
での会話や質疑、学会発表をさせて頂いた時の経
験が生きているものと有り難く感じます。40年も
の昔、一緒にデータの議論、ポスター発表で意
見、色々のご教示頂いた(当時は(共に)若かつ
た)先生方がとても重要なポジションに現在つか
れて活躍されていることを会誌で拝見し、嬉しく
思っています。卒業後は会社員になることが普通
とされた家庭に育ちました。ですから、学問・研
究の世界に進むことは考えたこともありませんで
した。でも、そうしていたらどれだけの研究がで
きたらと思うこともありません。今は
会社を辞めた時より知り合いの数もずっと増えま
した。仏教の話をしていても、生理学で学んだこ
とが影響しているのではないかという話しぶりに
気づくことがあります。今まで30年以上、日本生
理学会にお育て頂いて今があるものと深く感謝い
たしております。